

心学のいまを訪ねる

石田梅岩の教えは、現代にどのように受け継がれているのだろうか。現存する関西の講舎——京都の心学修正舎と大阪の心学明誠舎——の活動を報告し、時代を超えて人々を魅了し続ける心学の「学び」の場を紹介する。

取材・執筆／里中高志 撮影／永野一晃

京町家に息づく 学びの伝統

「子曰く、君子道を学べば則ち人を愛し、小人道を学べば則ち使い易し」とほのかな灯りのもと、『論語』の素読を唱和する声が重なり、昔ながらの町家に響く。ここは京都の呉服問屋街「室町」と呼ばれる地域の一角に居を構える吉田邸。いまここで、石田梅岩の教えを伝える、心学修正舎の月1回の定例講義「会輔」が開かれている。参加者は高校生から年配者まで多様だ。石田梅岩——1685（貞享2）年、現在の亀岡の農家に生まれる。京都の呉服問屋で番頭を務めた彼は、172

9（享保14）年、45歳のときに初めて京都の町家で講席を開く。老若男女の分け隔てなく、また無料で講席を開くことは当時としては画期的なことであった。梅岩の教えは、彼の死後、弟子の手島堵庵らによって受け継がれ、諸国へも広がっていく。その中心となったのが、手島堵庵が1773（安永2）年に五条東洞院に開講した「修正舎」であり、1782（天明2）年に河原町三条に開いた「明倫舎」であった。

いま講義を行っているのは、心学修正舎の理事であり、『論語』を教える衣笠三省塾の塾主でもある長野享司さん。「学べば人を愛する」とは深い言葉

です。いま我々が「愛する」というと男女の恋愛を思い出しますが、本来は人を大切に思うという意味です。『論語』の言葉は我々の社会のなかに身近にあるのですが、知らないで見過ごしてしまっていることが多い。ぜひ『論語』を読み込んでいただければと思います」

この「会輔」という定例講義の名称は、『論語』の「君子は文を以て友を会し、友を以て仁を輔く」という文句にちなんで堵庵が名付けた。会輔の題材のひとつとして『論語』を用いるのも、梅岩以来の伝統だ。

続いては、心学修正舎理事の後藤一成さんによる、「石田梅岩の世界観と日本人の心」についての講義だ。そこ

1855（安政2）年に小谷さんの先祖が「伊勢屋商店」を創業したとき、和紙の卸・小売という業種を選んだのは、それが利幅が少ないため、熱心に働かないと続けていけない商売だったからだという。最先端の情報分野に進出したいまでも、イセトーにはそのDNAが受け継がれている。

「紙は『冥加のいい商売』（冥加がよいとは、もともと薄利な商品は粗末に取り扱っては商売にならないので、自然と物をたいせつにすることを身につけるようになる、という意味）、つまりご加護のある商売だから、という理由で初代は商いを始めま

きました。企業が倫理道徳を見失いかけているいまこそ、また学び直す価値があると感じています」

心学修正舎の会輔で「石田梅岩の世界観と日本人の心」について語った後藤一成さんも、ビジネスマンとしての生き方に心学を活かしてきたひとりだ。大手電機メーカーを定年まで勤め上げた経歴を持つ後藤さんは、自らに「三愚」という号を付けている。

ました。そして『真に良いお客様』は、約束を誠実に、必死に守ろうと努力する営業マンの姿を真の『正直、誠』として正しく評価されるということを悟り、サラリーマンとしてまったく悔いのない人生を送ることができたんです」

社会の人々の役に立つことを通じて自分も「生きる」ことを考えるのが正しい道である。そう説き続けた梅岩の商道徳が、今日でも関西には息づいて



心学修正舎の理事長で、
㈱イセトーの会長を務める
小谷達雄さん。



明倫舎の柴田なほ子さん(右)と
心学修正舎の後藤一成さん(左)。
京都市内にある明倫舎の前で。

した。利幅の少ない商売ですので、いまだに子孫は苦勞をしています（笑）。でも、もしそのときにもっとほろ儲けができる業種を選んでいたら、きっとどこかで倒産していたでしょうね。いまでも我が社には、無理な利益の出し方に関しては「それはそぐわないんじゃない」と、歯止めがかかる社風があるんです。心学はまさに現実に経営をしている人のための商道徳として発展して

「酒はダメ、仕事は遅い、気も利かぬ」ということで『三愚』と自分を名付けた私ですが、『人間は天から正しいものを授かっているのだから、自分の善なる心に正直に従うのが人の道であり、商売の道だ』という梅岩の教えを学んだことで、営業マンとしての道が開け

いる。京都の商家にいまなお「堪忍」という額がよく掛かっているのも、そのひとつの証なのだ。京都における石門心学の学び舎として、心学修正舎と双璧をなしてきたのが、明倫舎だ。いまその理事長を務めるのは柴田なほ子さん。父は吉川弘文

不況のいまこそ 梅岩の商道徳を

心学修正舎の理事長で、㈱イセトーの会長を務める小谷達雄さんは、代々の心学の教えを受け継いできたひとりだ。

で解説されたのは、「誠」「正直」「儉約」という、町民にとって、最も身近な言葉を大切な理念として掲げた梅岩の教えの普遍性であった。「正直が行われれば、世間一同に和合し、四海の中皆兄弟のごとし」「まことの商人は、先も立ち、我も立つことを思うなり」というその教えは、CSR（企業における社会的責任）の元祖とも言われ、渋沢栄一や松下幸之助も深く影響を受けた。



会輔での学びの風景。

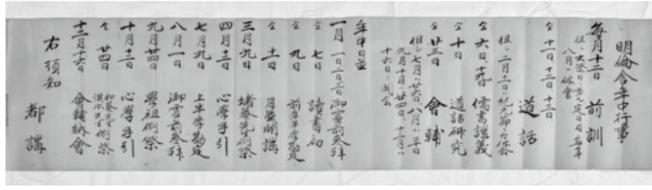


会場には「堪忍」の額が掛かる。



講師の長野享司さん。





明倫舎の年中行事を記した貴重な資料。



大正期の心学道話会参聴券。



明倫舎の看板。

館「人物叢書 石田梅岩」の著者柴田実氏であり、父も祖父も明倫舎で梅岩の教えを説いた。

「梅岩先生の教えは、人間は本来正しく生まれてきているのだから、教えがあれば正しく生きられるという性善説に立っています。人としていかに生きるか、という基本を普遍化することで、商人なら商売の道で正しい生き方ができるようになる。身近な話題で、身の回りの物事をどう解決するかを分かりやすく話したから、多くの人たちに受け入れられたんですね」

明倫舎では、石門心学に関する数々の資料を保管しており、会輔こそ開催はしていないが、心学修正舎などと積極的に交流を続けている。

大阪商人の源流としての石門心学

そして、商業の都、大阪では、心学明誠舎が活動が続いている。1785（天明5）年に南船場心斎橋に創設された心学明誠舎は、いまでも大阪の経営者たちの重要な学びの場だ。2015年11月に開かれた「石門心学講演会」では、作家・玉岡かおるさんによる大阪商人と明治維新についての講演が行われた。参加者の多くは経営者だ。関西にかけて存在した商社・鈴木商店をテーマにした著書のある玉岡さんは、



心学修正舎の会輔会場入口。会場は京都の呉服問屋街「室町」の吉田邸(京都生活工芸館・無名舎)。

石門心学こそが、大阪商人の源流だという。

その集まりでは、石門心学に関連する書籍を基に話題を提供する「読書紹介」も行われた。心学明誠舎理事の大塚融とよみさんは、『アダム・スミス——「道徳感情論」と「国富論」の世界』（堂目卓生、中公新書）をとりあげた。実は、石田梅岩とアダム・スミスは生きた時代が近い。梅岩の『都鄙問答』の発刊が1739年、『齊家論』が1744年であるのに対し、アダム・スミスの『道徳感情論』は1759年、『国富論』は1776年だ。主張に類似点も多いといわれている。大塚さんは、西洋と東洋において、ともに資本

主義の勃興期の経済における倫理の問題をとりあげた2人の共通点を、「信用」や「自律」という言葉をキーワードにして説明した。

中尾敦子さんは心学明誠舎副理事長であるとともに、石門心学の研究で高名な故・竹中靖一氏（元・心学明誠舎理事長）の娘でもある。中尾さんは言う。

「商売では相手が喜ぶことをしなさい、という心学の教えは戦後の日本の経済発展の基礎にもなっています。梅岩が偉大だったのは、身分差がはっきりしていた江戸時代において、女性や子どもも平等に学び舎に受け入れたこと。世の中をよくするには学びが重要です。そのためには社会教育に力を注いだ石門心学の教えを伝えていくことが重要であり、その結果として、もっと広まってほしいと思っています」

心学明誠舎理事の下野譲さんも「一生懸命にやれば幸せになれるという心学の教えのバトンを地道につないでいきたい」と話す。

また、心学明誠舎理事長の堀井良殷よしたか

さんは石門心学の社会的意義についてこう語る。

「石田梅岩は、『先も立ち、我も立つ』という共生の論理で社会に貢献することによって、商いは成立するのだと分かりやすく説きました。いまグローバルイズムの資本主義が広がっていますが、欲望のアクセルだけを踏んでいたら資本主義は危なくなります。欲望は発展の原動力でもありますが、それを制御

するハンドルとブレーキがいる。それが石田梅岩の言う学びの力です。商売とは、社会に貢献するためのものだということをもう1回思い出すことで、資本主義は健全になるんです」

時代が移り変わり、商売の在り方が変わっていくほどに、梅岩の教えはますますその価値を増していく。その教えを受け継ぐ学び舎から、新時代のリーダーが生まれる日を期待したい。



心学明誠舎所蔵の資料「童子教訓之講釈」は、江戸時代の学びの場の様子をいまに伝える。

特集／昔の暮らし



Special Feature / The Power of Traditional Life



理事の下野譲さん。



副理事長の中尾敦子さん。



理事長の堀井良殷さん。



玉岡かおるさんを招いての講演会。



講演会の風景。



心学明誠舎の歴史資料。